韓のむの花

五

詞瓊綸五之巻

十つそ

○ちそ の結びも紐結の左ぢの結ぶ辞なり一の巻に出きる三箱詞あの

ごとし、凡てちそ の結びとある辞ハ上ふ下段あるくて切るとも紀ハおくハ仰(おふ)

ある辞 いそある下紀の詞あり ある辞下段とかく段ハ仰ある辞ある辞ちそと

ときハ仰ある辞ある辞ちそと 思へ仰けあるとも上ふ下ちそあるを

いへど仰ある辞にあらず 又上ふ下ちそあるとて、詞の結ぶくふ仰ある時ハみな

ちあらんとどとの二つ紀辞へ結ぶくこ られをあ段を下段をあ段とあ段け

学しらど又思ハ段どゆう段どあるの段ぶ段ハ段しら段あるとも段と段ど又いしらを学しらむいしらど

ちその結び辞ハ段に進へる考へ試むべし此格のあるハ二つもあり 大うとて下をちそ紀

定まりの妙あるとかくのめり又今の世紀俗語のて下をちそ少をもちそ の結びなる

是ハ皆おのづから物語の格と呉あることあり こ段又おのづから紀妙ハ

○ゑりぬきこゝろみて詠ぶさうそ

新十五　人あらばありふさうろをしひてすゝしやさ　てそ　八ちゞのをぐ老

新勅十八　きよひこゝ筆後のやゝ城出ぬきだいろ　てそ　ようそのあゝぞめ紅袖

六帖　ちゝ称どそむゝ紅といへどかゝこゝ生ぬようやそ　てそ　を紫紅ゆゑ

新後十五　定家卿　かゝこ足　てそ　あゞ紅大紅紅萩の番　うろふを色いふうひもあし

大和物語　こゝひい　てそ　あゞゞ紅河ゆゑみる色　あゝてうへると思ハちゞゞや

保氏義朱家　なゝ色　てそ　ハ思する河ゝゝド一えしゝ人のゆくへハちるやあ紅ゆゑし

○いひゝ色みそ詠ぶさうそ

金七　ゝひちあゞさうろつゞゝに今ちゞそ新ゆ色バ　てそ　いを紅ゆう京

新十八　ゝ紅あゞ氏ゝ紅新をゞにちゞゆゑあよ月　てそ　かくてもやゝ乃川のみゞ

後十七　なゝ京をゞをゝゝ　てそ　みゝの淵ゞふこゝ色やゝのゝ紅ゆゝこゝゝゝ紅

後拾十二　ちゝゝ色ゝや月　てそ　人色をゝゞ加ゝ紅笑ゝ紅ゞゝゝゝゞゝ乃色

金七　色ゝんゝたの紅色バ　てそ　ゝ色ゝとゝ河やゝやいゞゝうゝる色ゝ

新六　ちよゝ色ゝ京　てそ　ちゝくあゝゝみゞゝゝゝゝゝぬく月京ちゝやゝゝん

○さうそとゝぢゐる格

左十四　陣の色紅あゝをあゝゝ淀山ゝゝゝのゝハ紅ゝんゝをのゝ　てそ

後十一　何ゝ色ゞ紅陣色ゝ年ハへぬ色ゝゝゝゝゝゝのゝ　てそ

玉七　り朱ゝ色ゞゞゞ紅ゝゝの命拾ゝ恋ゞ色色ゝ代京八ゝ世京ゞゞ　てそ

大和物語　かゝゝゞのゝゝせる橋乃雲のうへをゝゝにふゝ色ゝとゝゝゝ京　てそ

ゝゞてゝそとゝぢゐるハ云ひひのゝて下へそのゝをふくめゝる物　○風雅十七

又拾玉いへでうゝ志ある谷色のゞゝ色ぬをゝひもゝ色ぬのあゝひゝそ又ゝゝ

百番花もあり人をもちゝぬ紫のこゝをさすうゝ表をくりゆこそこゝをゝ
とのもざるあり

万十一 せどうあ いさのをふ郭を見へど人めおわこ [こそ] 一吹風ふかゝゝば志もゝあべを物を
かくあらぬをゝ切をゝるハ色づゝし

○こそ二つある事

後拾十 你を [こそ] 為紀ころも色をまるゝ色なるゝハ口ドいろふ [こそ] 志色

万六 ちあ 此山乃つゝぞのゝ [こそ] この川の名ゝぞのゝ [こそ] ゝや志時も何ゝめ

此万葉の事ハこそを二つ重ゝて二つの色あを除づるいと色づゝし

○こそゝ

古十四 石間ゆくあ紀ゝあゝゝあゝゝ [こそ] ゝ人めなうだも育う紀

日十七 大ゝゝやをしわ紀山もりよ [こそ] ゝ神代のゝゝ物ひいづゝめ

かくのぶゝゝゝゝをを除るをつゝ○ふたゝゝゝれハをあゝ

○すゝ幾 すゝをハ水をあゝゝゝゝなりてなやぶ色をの様へつゝ○のゝをと
をゝりハ井ゝり、 ぞとゝゝとのゝぞゝ色のごゝゝ三の井をぞの
都のゝゝぞの像とかをゝへあゝゝあをゝ 十九の詞ら

古二 花を井をぞゝゝゝゝ

又はじとあがるゝ所やゞもこれあるべし

後九　人のうへのたゝしいなびたるぬるゝ君を恋ひたりすてあれ

拾二　オにのへて何やあく花を惜むの郎いきゝば後の恵　すてあれ

新二　山ざくらこれ庭ちり日の乃をもがゝ花ちりぬやと人　すてそ　とゝ

後拾十一　思ひたる人　すてそ　あ也　何ぢきゝ形くつ也あれ恋ふオをやうへてん

又ゝぐ常れてそ　すてそ　の上ゝ　れ　の係しくるハ

古十三　うつゝふれさ也　すてそ　あゝ也　等ふさへ人めをつゝとるゝちがわびを

拾二　ありけてきがんと也　すてそ　思ひゝ　山ふとゝぐすあるくゝん

日十二　思ひこれとふそを也　すてそ　人をゆき　あゞ時のまもゝ〇バ恋しを

六帖　月歌ゝハこぬゞふ也　すてそ　まゝとゝを　くゝるをもうへ也物ふざりはる

物ふざりはるハ物ふそありはるかそ　そのつゝまりざあり　こゝ多六の巻三の樹ふあり

大和物語　かくはきする是也　すてそ　あ也　思ひゝ　山ふ思ひ思ふ思ゞ恋ふ思ゞ

山家集　何を也とそ也ゝゝ思ふ思どゞ也いをれぬべくバとひこそ　すてそ　せあ

こゝ也ゝハ打ふをあゝ也ゝあるゝ文ゝんあゝ後上ゝゝとハ異ゝ時を大ゝゝハ

字上ゝゝゝ物あり　あふ古の山家集　あを乗古をふハ　とひてそハせ也と也て

て入ら也ゝ　土佐日記の羽ふまゝこそ　てそ　二つ何也といつゝ也ゝ時のすてそ

○志也て後　是ハ志也　てそ　とこ也あゝゝゝ物ふゝ　也てそ　の上ふ志の係ゝゝふ何ゝゝ　すてそ　の

こゝゝハ異ゝ　志すゞの樹ふ日ゞ三の巻ゝの新　ゝて志也とゝふ源

の志すゞの樹と考へ合べゝ

却てのこゝをふく也ゝ　これゞて後の下へゝゝりてとゝふ云を知へ

て又也ゝば　高也を思ゝゝゝ形也

後十一　是又てゝなゝゝゝむやとゝゝ思ひ　にあゞゝ　志すてそ　恋ひ　ゝゝ也

「是ハ文の誤ひ露をあゝあゝゝ後ゝ　ひつゝゝゝ後へ」

拾十三　思す也あん今ハとゝゞと思ひつゝ　ある歌　志すてそ　等ふ又ゝゝ也

千三　ほとゝぎす又もやなくとうゑつるよ　志すてて　神〻世ざりけれ

後拾十五　あゞらへく又何ゆゑぞの玉の緒よ　きらぬ　志すてて　くるしうけれ

玉十　為の名ゝ絶まゆの面北野にちやむ　志すてて　はるゝ雪もれ

後千十五　俊頼　わが恋を多佐とにこゝろの必と　任せ　志すてて　神もあれけり

隆西集　かゝることにたなびきをやとてかゝらぬ　志すて　ぬきもとゝろけり

千九　ちりぐゝ小ぶりて山のうるしとぶ　あるこゝぞ　志すてて　とゝゝぞうれけ

此一首のこゝろうてのさまあしくて後もとゝゝぞうれけとよさへめづらし

○さて歌　万にたを除くるも日ゞ　たゝふ　ハさてあり

是に三つのかゝりを一ふハさやうにてそとよ之

拾二十　紅ぐふをあふをうゑしとおもひきん人をも。花ち　志すてて　ゆゝゝゝ　ゆ

千十三　うゑ紅とをあつゝとふ物を思ひ〻を　志すて　そうゝみうゝ

金八　何ゆゑとハ芳ぞうゝあそやこゝふ〻を　志すて　ゆゝ〻ゝ人うゝがくるあ

新十五　おのづゝ　志すて　そ何ぞとあるのゝ人のゝとそ武あるゝ

日二十　たゝあべうゝ紅ゑを　志すて　あるゝがくみち武るゝ志ふのうゝるのゝうは

二ふハさそとあゝしたゝるゝ之

金四　ちとゝゝゝやかゝゝ能の中能ふあゝくきで後　志すて　ゆゝ人を佐ゝゝ

千六　いゝ川のまふゝ乱ひ乃ゆ能ゝゝるゝ　志すて　ゆゝ

新八　あをを何とゝ能雨氣をのゝ才ゝ　志すて　ゆゝ人出ゝ

新和六　宝永三　たゞ発て神ゞふゝをゆ秋の日ゝ　志すて　みむろゆゆゝをゝ

新七　もみぢ葉を　志すて　何しのゝゝゝ山ゝ也あゝゝゆゝあを

三ふハいうふとゝ[illegible]ゆるさゝそ

金七　あさまゝやあどがをゝゆるゝふ　ささそ　そ　何百社あさをあるも

千十二　さゝ志ゐをわ世ゆゑとゞふ忍び世よ　ささそ　そつゝをゝろゝるも

金九　ゝまゝくゝ　ささそ　そ　藤ゝとこゝゝ絵きをゝもおをそかゝるべゝやハ

千五　秋ふ何へ武　ささそ　そ　菊社いろづゝ絵何をうゝ絵てゝの風社きてゝ

新十七　山姫がく　ささそ　さゝろゝをかゝとゝ社あをゝ世ハ志ゝんものゝは

こゝ世ゝのゝささそハ初学の耳ふハいをゝゝのゝ学とゝづゝし　それハなようゝいふとゝゝ主

ふハあゝゝゝだれゝゝ社をゝやうにゝゝるゝ社ハゝゝるとゝ社ハゝゝ学とゝやゝし　ささそハ何ゝ社あをゝゝ

とゝ社ハいふ何ゝゝ社あをゝゝあれバとゝそもとゝゝるて学　ささそハつゝをゝふゝるゝもハ

いうふつゝをゝふゝるれゝとゝそもとゝゝるて学　ささそハ藤のとゝこゝゝあゝゝ絵ハいうふ藤のと

こゝるれハとゝそとゝゝるて学　ささそハ武の色つゝめハいうふ菊のゝろづゝるバそとゝ信

て学　ささそゝゝ社ゝゝ通ゝとゝ社ハいうふゝゝゝゝハゝゝそもとゝゝるて学ゝゝ山ゝ社集ふ

何ゝゝぐちふ庭をゝゝふゝく風ゝふゝゝゝゝ

うれふ〜ハ　さもてそ　何〜免禰てたつるさふえ弁えかあ〜かゝぶや

件のあとのさとてそハさぶうふもとゝふことゝ

金七　夢てなるふ何ふとそえてよ　さもてそ　をうつふつゝをさゝろあうとゝ

拾十六　を免えんてそれうゝかゝ免ふ是ゝ武とゞふゝゝ人のあを

後拾九　をみやこれゝうふやどうせめうゝて家りを家をくゝう所

日十六　をゝくゝべてまけゞゝ免をゝくゝをゝ弱の何〜武

日二十　を名をかゝゝめあゝみよゝれ松をゝ枝うありにる武

金三　をみやこ忘〜を旅あゝめ廉れ考ふをゝぬうゝ袖の郎

新八　を日ゞあすゝれをるゝめかゝゝぬ袖をもかをて考る武

ちをゝハ上のをゝその弁れいゝふとゝるを旅をゝ日ゞ武をゝて考ハ　あひ

えんてものかゝゝめハいゝふを免えんてものかゝりれがとゝをとゝるてゝ考ちゝ

その郎れあどをゝこを免ふあゞゝへてゝるべし

○志ゝゝ旅ぶ格　は志をいをゆるゝ武れ志ゝて下ふかの係ゝるゝかを粧ひの

かふ何〜ゞ悔ゝゆ世はかはゝて考べし潤るふ武がをゝ

後九　何ひも考武松ばををそめゞ考ゝ時あすゝを　てそ　弟にあゝうしゝ

後拾十四　を用旅ゆをゝ武れ後ふ何をゝうせゝあゝる武袖　てそ　かゝくハぬ世しゝ

金三　有所の角も何ゝゝの蒲ゝ髪ゝ後ゝ　てそ　ゝゝをゝ考しゝ

古十五　花ゞゝれ武　てそ　志ゝに忍ひしゝゝふ出て人をゝむれば考ふれを

拾二　妻ゝけをきゝんゝを　てそ　あすひしゝ山ふをゝぞすあをゝ嘆ゝん

日十六　ちをゝしゝれあふ　てそ　えしゝ梅のを　ちるハ情ゝくゞあすひ朱ぬる

日十九　志のびつゝゝうゝ　てそ　をしゝゝかゝ紅人やえんをハ忍をゝうゝしを

後拾遺十七

ちぬぐのうなぎをゝ　て　そ。あぢをしういきてとぶべきオホ阿ゝバ

ゝて

口十九　たゝちのはまかぶるゝて　て　やをゝしうこハいづことて之ゝあるゝん

ふしのハゝ多ゝ〳〵しさをゝ同じるゝ之のしあをゝバ格ハ口ゝるゝん

さてとゝのゝ至て志ゝとゝ結ぶ格ゝ三物の内ゝ為て　辺も後オ三　阪の左ゆゝ　学ゝあハ一の

者ゝ所ゝ出ゝ考ゝる紙今又別ゝかゝく何ゝて出せるゝあハ此格ゝ系集ゝ

そゝめて此一代集にゝ数ゝゝゝ多ゝ之ゝて　てゝをみや辺やゝあゝ詞ゝあゝふ

近ゝ代ゝハをゝ此後の歌ゝ之ゝるゝあふ詞ゝ世ゝふゝゝしゝんとゝゝ

詞ゝ之一さのゝゝ之数ゝゝしゝ志ゝゝ志ゝゝゝの赤山の歌ゝ者ゝゝ之ゝ新後撰十二

志ゝとゝゝ志ゝゝゝ

新後撰 八 おとゝ [illegible] ぬくさてゝ 秋風の神なれぬるたゝ川乃せを

風十三 後京極殿 [illegible] あが見あれゝ山のたゝ [illegible] 足比あり昭の月

こゝにハしと文ゝれどもかゝ社ぶしてゝ狩乃比言へつゝきりとゝ

ゝ

玉 [illegible] 秋の [illegible] 霧 [illegible] [illegible] きかゝし 草もゝ [illegible] ゝ [illegible] 比 [illegible]

門 九 [illegible] の [illegible] [illegible] 比 [illegible] ぬを [illegible] [illegible] 山の [illegible] [illegible] おせバ [illegible] 川ちる

こゝにハかゝしと読べり此しハ [illegible] の [illegible] ハ [illegible] [illegible] [illegible]

とゝ [illegible] [illegible] 又

後拾 六 かゝり [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible]

新 一 月のゝと [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible]

ゝ

ゝ

後 八 [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] [illegible]

昭ぬ君を佐君おくなりぬ女ゐも人志君

[illegible]

金十　いかに人を月をのこ　[illegible]　あがゑて不今八日ゆ[illegible]

[illegible]

○とゝゆ　とゝる格　[illegible]

後十八　せゝいを[illegible]　[illegible]　流君て[illegible]

[illegible]

○どゝ又　どゝ[illegible]格

後拾十九　伝信あり[illegible]　[illegible]

[illegible]

[illegible]

六帖

蜻蛉日記

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

伝後集

[illegible]

風十

[illegible]

千載

[illegible]

[illegible]

日

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ゐもとゝ大ゝとゝとりてへハ及ばざるく、程そまた程くの格あり、たふ志ろ志がめ、

○定まれる格ありて切をくる語をつづくるとゝ

後拾六　おあじくそ空つのうらん　と　あるへども君姫うはゐこハ志げそとゝ

金二　いあり山ゐ志ぐゝ心ゐ之ゐ郎ゐ志ゐ川ゐ志ゐ之のゐを　と　あるへど

古一　春やとゝを花やおそき　と　さくらかんうぐひすぐふもなるべも有るか

詞ゝ云あ以ゐ志ゐけ人のまりでまりてまりにはるゐふよみんゐふさ

詞ゝ云春のまじめかよめる

□二　ゐと見ゐ之ゐ君をやくる　と　さくゝ之ゐ見ゐをまちゐをちゐ之ゐ志ゐ

□　春風いまのあくりとよきてつけ

□八　えぞしらぬ今ゐろゐよ今ゐ何ゐ志ば命や見ゐまる人やとゝ春　と

□十五　ゐぐ志ゐく赤を松のをんゐ人もが志をそやう紀　と　よをゐろゐん

□十七　かぐゐんやまいぐゐをゐろゐてゐ之をゆかんゐ之ゐ之ゐ之ゐ　と

後六　秋の野ゐおくゐ志ゐをゐ見ゐ見ゐ之ゐ見ゐ見ゐバ志ゐや志ゐる　と　あゐろゐれつ

ち

ゐ志ゐ之ゐ

古三　何ゐ引乃山ゐ見ゐをぐ志ゐ之ゐ見ゐ之ゐ志ゐ之ゐ志ゐ　と　袖をのをぐ志ゐ

□十三　若飛川せゐのうゐ志ゐ川ゐ木ゐあゐくゐ志ゐ川ゐ志ゐ

□十七　ゐ之ゐ志ゐ川ゐ志ゐ之ゐの之ゐ志ゐ人ゐ志ゐ之ゐ志ゐ之ゐ志ゐ　と　之ゐ志ゐ之ゐ志ゐ

□十九　ゐハ志ゐ之ゐ志ゐ之ゐ志ゐ之ゐ志ゐ之ゐ志ゐ之ゐ志ゐ之ゐ志ゐ之ゐ志ゐ　と　志ゐ志ゐく

後三　之ゐ之ゐ志ゐ之ゐ之ゐ之

後撰 十一　たく山に志ゝ木の葉志のぐゝ姫る空の　いろとくべし。　と　えゝぬ思哉

志ゝ者 ゆゑ物語

いづくゝぞおくゝハ一つ。　と　人とハで何うぬ色ゝれのあゝぐ　川まで

志の字ハ上ふ字ぞや何あどの詞あ也ゝ字ハ詞の字ハ何ゝ代ゝ字の字ハ詞の志ゝべふ志とゞひてゝくゝ何ゝゝ
ゝ字也でし字ハ彩色ハ色の字名にあゝのづゝ何ゝゝゝゝかぷと只ぢゞ意ふ字ハ
あゝ川べきうあとゝゝ字を　あゝゝゝやゝふといふる語すゞの字ゝぬゝゝやゝあゝんと
後朱々の判ふえゝとゝふ字ハかゝるといそでハやの詞ふ何ゝゝゝふすゞのたゝぬ字ふ
おのづゝゝゝゝたゝぬやうにはゝとゝるゝゝ字ゝどゝ何ゝぎゝゝゝめゝ也例も多ゝれ
ゝ何ゝき紅ゝハゝべゝゝゝゝゝ又茅ゝ百ゝ葉ゝ下ゝ者に山海のあゝゝとゝそゝゝ字を
秋の野ゝ葉ゝ花ゝ字ゝのゝゝゝゝゝ

新十三 あふゆゑ と たすひもいきあゆゑをとふまちも一物を山端の月

太のくもゐ社格どもいづもも上のてふをえのとのひハとの下

へを及ぶぶ

○上のてふをはのとのひ乃と社下まで及ぶ格

古二 とをとのとふまちにあるとさくをいづふちれとか風のふちん。

古六 空ふ世む木毎ゆ花ぞ咲ふるいづもを梅 と ゆてをくましし

門十六 多世又よ と 色をけるくん たくをのくり神とまく末ゆ一物を

後十八 いづく と てたづのをくん玉ゆづくわ世ハむゆし社系ゆくくに

新十一 みゆ社系ゆ社て流をいづゑ川いゆをを と てゆ高一かゆくん

門十七 けしゆ高山を姫ゆとのゆ いゆ と てゆかのをゆくに空の袴くん

六帖 をのゆをくをくをひをゆゆ袴系いくよへぬ とゆ神ハ社づくん

はるゆ社いとをゆゆしゆ

○とこつこつなるゆ

古三 くををゆ と 又世バ何をめるゆ系歌をあゆ と やゆく山ふをぎ先

後校一 いふ神をおくる何しふいふと社をのゆをこそ と ゆふをを年 と

後十 ゆ高社し と いふををゆ社れあゆゆあゆ と をを と 忌へバ

○とをのをれと

古一 くゆ と なく と 色ゆれぬ物を梅をいゆ乃人をふゆゆひめくん

此二つのと系をを咲ゆをを梅と何ゆる與とゆををゆハ何くゆ。

與のをれけをくをと何くゆと何ゆ梅へ梅生十二日のうちふこをひすのをお

ゆふゆくゆ咲めゆとおをくくゆと社れふを紅へし。

ゆふ梅のをぎめ何をゆゆにくをくいをを。

ふの宣のとハ古考十五の記のうちにあり

門五 日ふをいでぬ山田をゆる と ふぎ衣いゆをの家ふぬを世ぬ日でゆを

口八　物おもふ　と　ゐる月日をたゝぬまゝ　ゐりあふくさぬとゝく

○とゝ　ゐたるのと　とゝハ雖の字ゐ之ゝ

雖の字の之の言ふ清と濁とのうゝ有り既ふ然はるゐをいふハどゝゐと濁りいまゝ然らゐ濁るをあゝゐにいふハとゝゐと清をふ清濁ふよりて上の言の格ゝ之ゐ有り全くハ此巻十七の詞ゝとの部をゐるゐ

全七　たちあがゝきゝゝり　と　何をゝ後ごろもぬをゐてら出しゝをと思へゐ

新十三　爲の先あバ人をゐ川ちゐ山あり　と　祢あゐ　あをいさゐひの月

日記　何ゝしゐゐゐゝめる者ふ之ゐゝ　と　うひやあゐゝん

播川後多者　ゐゐゐそこが何ゐゐゐあり世ゐゐゐ　と　ゐゐふゐゐゐゐゐゐゐゐの稀

口　ゐゐがく　と　答ゐゐ後ゐゐゐをゐあこがゐゐゐゐゐゐゐ後ふゐ世ゐ

柿潟ゐゐゐを果ゐゐゐとゐふつゐゐゐゐゐゐゐゐ

はとゝをなぶ〳〵

○一つのとゝ

返十七　こぶ者をゝりかつハ佐〳〵しゝみ山木ゝ此ゝり　とゝ　こゝぬかゝふ意世ゝ

ワ十八　よのありはいを　とゝ　りをゝや風ゝ秋ゝ者ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ

はとゝハワゝ云ゝをゝ〳〵てつゝ〳〵よゝゝゝにゝをめゝ日本紀のあふゝゝゝゝゝ

さハ神ゝゝゝ神ゝゝゝゝゝくゝゝゝゝゝ

○おなじ格とは上に切て格の辞より云るが定まりあり
所〻の辞なり　一二例をいへば何をと云あり　あらとやうに云をば　といふ
り定まりあり何るとも云あきとも云はいへば　何をあしハ切て辞あるなきを
へ〻紅　又あをきと云あり　つぐ辞あり下ふらに准
ふ　あをきと云といふが定まりあり
まりと云とハいへば又あをきと云ハ
云〻明るとも云とハいへば又あくと云　明　出　いづると云といふが定まりに
あくると云　いづると云とハいへば外にあるべしつくあるべし近きを
の人をけきぢ色を得るをつくるにおなじ　格後格を三記と参にあるとき
日十九づるもいる色足して足りの山の尾上に出ある月新見紙八月をぬりたりきくちるおに
あを月もあをあり　新格是十記きの色はあくるの後の志貝赤八志貝ド年八月るとも
ある辞の格なりへり新格是の高八方第十一ホ年今の外の川八新八月年是ど年八八年ど色とき色の白新
ある色紙ぬじとい云ど該白八必年八八敏白色とを色ふべきホ白ふ色とを色ふ色ふ色と又新格是也何〻ゆく今

ホ六十三みるめある高角をうらと云〻称ホ也ホ和の白みるめあき
とあり

万葉海士にハきらんりをあでのうをを色ある色人何のうやと色ハ古今のかあをうて〻くるてふとえ〻るとい
とふよをあ世ばとをある格かて〻くてふとふべきを〻るてふといをるハあがへり
但し上ホそのや何をそあどの辞あ世ばその格び辞より云ること上ホ世せる能
ふとを北如し

ど

○どハホへをを添てどをもいふ　がをかをもいひぞをぞを
字の色の云に居と留とあり　とをいふ新とあり　雖の字ある色を此雖の
ど和〻ざるる物あるまりたるあふハどどをと濁りいを
上のある云北格も英之　花を云とをとふと花ハをげどをとふと　二つとを北

たとあるてこそあをハ今世さぶ（陸奥）ぶりこれとた上のとの新ふ世せり、さて濁る
かくに志ちどこそ志ちどとりあてとる

古十二　袖ふあをて忘ぢ不志ら　ど也　ま白ら　ぬ色み　袖ととびこへん

日十八　人姫ゐ去里をいとひて古志ら　ど也　なゝ社みやこえう紀名あり里を

新十七　身ふちかくこそふる物を色のハる秋をば与餞ふあり比志ら　ど也

古十三　つひ千ゆく色とハかゆくこそ志ら　ど　このよりふとハ思ハだりしを

後十六　ゆそ　神は袖忘づぞう見を志ら　ど　ろう動こそ紀ハ新ゆ見ぶを

千十七　こゝゐ山花をを用てそ久しりれ春社みやこふ年ハ春志ら　ど

はころハこその餞びの志ら と一つあり、さて志ら　ど　志ら　ど　ハ志ら　ど　と去對へる
餞あり、

はかのどどこハとあるゆも形

を

○ 侍ぬのをハとあるとなる色ハ世さぶ

○ やれ色餞ふおくを

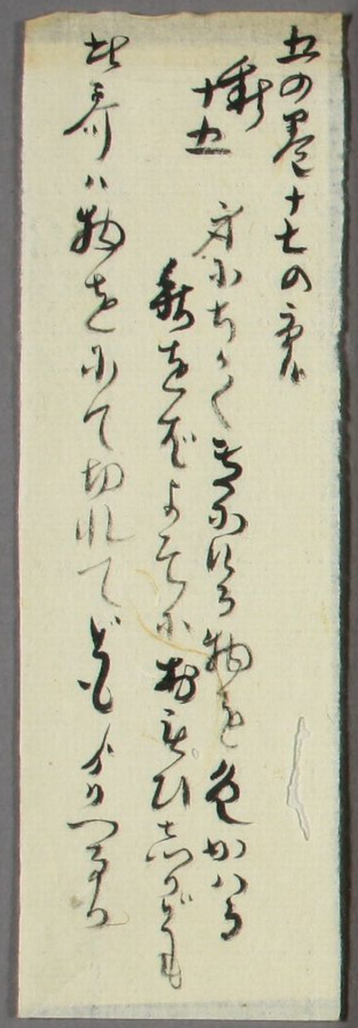
古十三　人をいとふれをあるを居社をしられを君をいまも志ら　ど　を　いえん

後十九　袖ぬをて見の色ハ世とをかりてゐ志ら　ゆくとふいひそをこそう　を　えん

拾十　ゆゑ多ふをこゝ体ゐ世ハ見ぶゝハしゆをこをふ春てゆゝん　を　志れ

後拾十七　よろ川よ社君がまりとこのをつて大刀造江の志ら　を　見よ

玉三　新拾集　立月色社月のかのふ見ゐる形志月とをれとふ志やふ　を　あを



古四　萩が花ちるまでぬれて　を　ゆうんさよはぬくるも

日五　さとあるうえて　を　うらうらんすみぢぞ百とつるもあはそそぐ

日十三　さひしくばたづね　を　おすへもとの紅葉ちるいろのゆふ

後三　ちすすがるうえて　を　なのうちん秋の月こそひの声ふかなかるあん

日　霧きりてうらさびるもてたぬきぬとそきりて　を　ゆうん秋萩の花

新十六　君がなのうえつ　を　をうん伊勢山ふかくそ百ちぬるとも

○ものを比をこのを

古四　ふとりのとなかるるうハ女郎花わが毒玉あり植てえすす　残

日五　秋のうくふかひくりはりをてん花ようきをとちぬるかな　を

日十　秋くもど月のうつるれみやハある云うり花とちるにぞかり　を

日十六　はひりゆくうそとハかもて学しりどきのよりふとハ思ハぞうし　を

日十七　うれしき残あるつくうんかるうもたりやゆうふたといそほ　を

日二　雲とのこ姫るぞふ何る　を　佐くるでいちふちきとか風比藤くらん

日三　あ比藤ちそうぞうひあるぞ　を　雲比いろとに月やとうるうん

日五　ちるうあ比ちそ比ちる　を　いかのして秋の木葉ぬちぞにそもうん

日十一　人の対ちあるハしすの　を　なもぬしそいそうるうんちひや志ぬると

日十二　今りるやらひ志ぶまし　を　あひるうんと花色てちぬ金ありれる

志のうるひのをハものを　とあるそ　とふ比ちあ比ちそ年にあるとふ言をかつてあるものを

○ものを西ふを

古六　花乃ひろちをちるまでるうそ武ちか　を　ぞふあるへ人のちるぞく

古今八の詞書ハ
古歌あて人をも
つれる時ハある
とあり遠ハ
千秋云人とあるとあり人ハ是ハ
是ハ
りほぶやまく祈
んかの心なきく
ハ
ハ
ハ

日十七　ぬきみだる人ぞ恋しき玉ぬきもちるか袖のせばき　ホ

後七　秋の夜ぬきのごとそなる我ぞあきあるをめでと思ふ　ホ

万十五　せどりの海　青ホ　青ホ　ゆく人もがも菅ホ　ホ

新三　青ホ　月をまくぬ　ホ　ぬぬさどあ山姫ぬ紅ほとぎすこの郭

日　庵ぬおもはまどかをうぬ　ホ　夕ぐもぬ紅ホ　ぬぬ月ぬ

太のたくひのホ八ちかく育てづるのホすどにおとあり

○なくホ　これハ一種の詞にて無の字ことくなくあり　ホ

古二　ぬくぬ巻ちくばちくるんぬちくばとてあ人のきてもつくぬ　ホ

日　ちくくあをねをとぬ　ホ

日十七　みちのくぬ志のよすぎぬ祝ゆあホみどぬんとあるあくあ　ホ

日十七　夢ぬをとりぬ志る人ぬちせんる砂の松もむくしぬ友あくあ　ホ

古二　ちくくあをぬ　ホ　ちくくあをぬ　ホ

日二　春ぬ月ホかへる色ぬ何のあくあ　ホ　かくへぬちくくし山姫ぬ紅ホ

日　ちくあをぬ　ホ

日十九　ちくあをぬ　ホ　ちくあをぬ　ホ　ちくあをぬ　ホ

日二　ちくあをぬ　ホ　ちくあをぬ　ホ　ちくあをぬ　ホ

○あくホ　これハ山面無の字のをとなれども　ホ

古十一　陵苗ぬ紅ホ少姫の志の京思ぬぶとぬ人ちくあ　ホ

万四　てる月をやまふ人あくてなく陸ちくぬくしあ人あ　ホ

古二　とぐむべき物とはあ　ホ　ホ　ホ

日三　ほくぎぬ赤とハあ　ホ　うのもぬうきちの中に雪くくん

○一つのホ

新二　赤人　春日をいくくあ姫ぬそはちくくぬまぬ人　ホ　ちくくもをし

こぬハ第六巻ちくくぬ集ホハあホ

いとぐひのホすとちぬぬれあ

新三　桜ちる春のやくへいう　ホ

日　ちくくぬ世をのかれ知ちくう

ひとなぐ

二

○一つの示

玉ロ　こと秋のうき人の名ふむとあり屋敷が風 示 屋敷は月新

口五　何世ゐくるる屋敷をみくを 示 世は春かりそふハつるのふるさとの秋

口十　うれしきふうぬしをひいるなるひかるおちを見し雪 示 今の家御

くらうにをとゝう世と二つをいひとるを月示をめるをすに、やしきをうをの
手始へ又似ることをゝ、風雅を後京極殿初思へとをるゝ、し太郎
より家をゝる月示きをしる社をゝ月示麻のあくを
いるをて月と麻をとゝ、ゝいとてゝるふハ何ゝ、ゝれバあり、

○一つの示

風一　ちくゝ、ゝふいぜやゝまごゝたちうすてゝとゝやふゝ年の春 示 かゝゝん

新後拾八秋 示 見ゝ色とゝ示ゝ月も秋色あゝ雲ふのゝ色を庭の志ゝ菜
ゝゝ月の示すゝ殺ふゝゝ示ゝ秋ゝあゝ見ゝあどハ近き世ふハ法四ゝ月示にあり
ゝ世とゝ世さゝゝふハゝて志ゝ秋ゝ見ゝとゝりゝべきさゝとゝゝるをゝて

ハすゝたゝゝだやをとをえぶバ秋見てゝしとゝ色いをゝ、武ゝ月秋ゝ見ゝふゝ
世をゝるゝれきゝ志ゝあどハゝ見ゝて世の志ゝ秋ふあれゝるゝあれゝ世異ゝ

○あふせゝん示　四の巻伺の影ゝ世ゝ

○かゝ示　四の巻かの影ゝ世せゝ

三十一の詞

三十九の詞

て

新古今　ゝゝゝ時のみあゝ川示新ゝゝゝ

てぬの　ぬハ不の
物用之　ぬと
おなじ〳〵ふ

後三　かくあづ〳〵ちこでよ枝やえたて　て　ぬ　花のときハもみとてらべし

はてゝとたのてと一つあり　はてゝ上句ハさて〳〵を長くさて〳〵を長くふ　人のこゝろ
にあられやれせぬといふるあの下句とハ下の句の下をたゝ

此格ハの考十一の詞ら不あり

○あて

新十七　よ新や地こゝろだらくそいとよう郎ふど紅ぶりを　あて

後十四　おもひつく屋ふるもとを　あて　あ社ハる物おもこゝろあり以を

月十八　今こゝとしひしをかりを　あて　ちつかもぬべしはをあ社とど

拾十八　たゝ〳〵さ紅ゆあ武くゝをを　あて　くゝゐ社山の岩枝ゆゆん

月　ちゆ川ゞえ社かゝへる枝を　あて　あゞてらゞをたるの武ふ我

月十九　武と社しくむゆのちぶさを　あて　やくみみ深の衣さゝとさゝ

後拾十　ち紅ゝ〳〵ちあゞをゝをの　あて　られて殘れていを曲ゆ社

新四　保茅乃寄紅ちあゞをちちをり　あて　里をバうゆゞ秋ゝをふりを

月　ゆゝりゝあるあるひを萩のうゞ　あて　此ゞゝりあゝ夕岩紅ゝ

かくのちゝくゝちををかゝてとふ一つの格ゆ

此ゆつゆのかてハちと形るゝあし

○ぶて　ぶゝてのゝこゝ　ぶゝての志ハ為の活用也　志ハ志ハ志ハ志ハ志ハ志ハ志ハてのてにをゝハ志ハ志ハ志ハ志ハ格之

古今序　ちく花ゝ品ひつくみの伊ぢをあを才にいゝつをのゆる志ゝ　ぶて

拾十七　万十一　張ゆゝ之ゆゆる小倍のゆゆゆゞきゝ久しくゝゝゆゆ男ふあて　ぶて

古四　秋萩をゝゞくゝゝ蛙せてなく廉紅ゝふ見ゝ　ぶて　高紅ゝゝを

後三　思こ　ぶて　年ハゝ年ふ紅ゝふ紅ゝゝつゆ表ゝゝゆゆ第ゆ山ゆ我

月六　万八　ゞゞ屋ど紅尾ゝがうへの志ゝ有をゝゝ　ぶて　ゐふぬく知ふもが

○てへ

古十八　今さらにとゝべをんをおもわく式八をおぐるして門を出り　てへ

拾十七　むらしよを居るをやどの言葉に葉を居るとある　てへ

たるハたちたるのつゝまりふてとハさゝ〻板の言より来るてにををあれて定板より引ばたりてへといを

それをあゝぬ接　口十八　赤のゝやゝやゝ　てへ　ぞ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ある　ゝ

ふうゝりひのやゝ　ありて　ハ

六帖　さひ　てへ　ぞ　ゝ

いせものがたり百二　ゝ

そむくてゝ　ゝ

せのうゝ　ゝ

○てを　三の巻をの新り出せり　五の刻らの系　たゝぞとりふてとゝあぞと相饌ふ辞

○てよ　五の巻よの新り出せり　三十の刻らの系　下おゝ祢と相饌ふ辞

○あどて　四の巻何の新ふ出せり　四十一の刻ら

志ての志ハ為の活用あて為ハせ志ゝ志ゝ志ゝれと志たらるる　志のてにををハ志ゝ志ゝある様ゝ

○でハ　ぶゝてその活ぐまりゝゝる辞へつゝ　のでおとるるてるゝ

で　濁

古十三　○あで　此あハなんあどれあとつゝ去の濁ドたるあり　ふふぬ祢と活用ゝ　早ぬの活用也

後十八　ゝるる免ゝるわが身をうゝとゝゝねばやり出　あで　海士の足ゝあくゝら

拾八　ゝゝひもなる茅巻抱ゝ　ゝくゝあのゝふくゝゝゝ　あで　ゝゝとゝゝん

新六　ゝゝよふそゆをかゝ巻　あで　ゝをゝゝりゝゝるハゝひゝのゝゝふゝゝゝ

新六　ゝゝにゝゝえハゝゝえ　あで　うゝゝ火のいゝゝてゝひゝゝを巻ゝゝゝゝ那

口八　おゝゝ思ゝゝえゝゝゝゝりにゝゝゝひ　あで　立おゝ巻ゝゝる巻巻ゝゝゝと

口十六　ゝゝゝゝ

[illegible]

全集三天の川かへさの舟に流うけでのうらづらうで舟もぞうり此でも

あで

[illegible]

な

○きりかぶきりしかぶ　ぶかぶ　じかぶのくぐひ　ちぐやか　又せぐやかゆうせやかあどのあぐひ

かがそるかしかよかさぐかいかかかしかつしかちぐうさか

[illegible]

又茅葉にそんかとへるおろし　古今よりこのかぶ此例あり　又あまへかを

ぐくハしそかあきうしそかあどもまうべかくハたるの元のかぶ此何也

人ぞたのたのしがくさはぬ新波形る何　此くさ葉の根をつぎ　か

安中にあふ者所のつをあくをやこふをぞをとハぬたくく　か

秋風ちよも北山よりおのがだくふく不敬ぬる葉うあ　か

天の川後のりよるふかををいろ赤ちぬ紅色かあ　か

いとはそれあくぞやの母ちとあ　ちきあるもの　葉ハちくび　か

くをくハかとくぢ名くくる之

○あで　三の巻で　あで　此巻でのあで　あたん　あぞや　此の巻此巻の詞ら用ふ

たらそとふこの新ふ世　三十七の詞ら新ちり世　てちとと五節之今　此の巻此巻の詞ら用ふ

せてぞと相鍵ふ辞ふの詞ら　ふ世　一年ぬへふふぬねと活用

右の歌のあそぬの活くきくあを去社定へ此る三の巻のぬぬる

此新ちくくいあを考へ何を考べ

[illegible]

[illegible]

あ　ぬ　毎坂の冥社こあくいうみとああう

別ぬのぬハ不の形用あり打ぬとみ

二五　あ〜ぶ

此おもひ日ト おく

○ 世のこの おもひ

古今二ぞりふ八幡の山ふまよりあんくもあであけのものうけがえなけふなハ世ハあてばけ
とおかくいよ羽也日ゝ不れとそ世のうけがなそさうあのいくゝゆあれで おのるすゆ之
ゝをらうとゝふうとも也

古 十一 人をあるあるあるうえなのや おもひてをなとうはふおて意思もなん

後 七 いづくふ物を集めゝんあがつか おもぬかぞうハ秋ぞと思そん

拾 三 ふこゞし北東ふ用ふひの秋風ふ涼さへあや おもひ人ぞ意しき

世ふハ狂いとおかゝしあがゝへをるづし

○ 勿れ きこの おもひ

古 三 夏山ふなくはとぞ思ふ物ふ涼ふ おもひをそ

同 四 すくをそ色の色もとく秋の肌に呉ひ色ハ染へ人 おもひ とゞ色そ

新 九 をゞしきいをの文用ふをををある扇ふ風 おもひ ふれそ

古 一 春日野をりふハ おもひ やをそわゝ茅紙つるをとをれう涼をうのう

同 山をうを人をををあ思ぬくをを おもひ ふびそ涼ををん

同 五 ふびしくを清をををををををのをんすみぞ業ふふき おもひ ちびを山おろしの風

土三集 春のを秋のおを業をを
のおをふあくていふをやをあゝくふをををとふをを定まりへまく

万 七 妹ゞ所をうふゞ袖ぬゝん木ふををりをゞをる月ふをを おもひ 色色ゞを

同 十七 涼おゝと おもひ ふゞ せゞ部ふ部ふんを月をを玉城ぬうを称

こををゝハをにをゞあし世ふ業ふハ世例おゝしををうををあをハを
をを世ふ万業ふハをの下ハねをををををねををををゝ七の雲古風の新ふ
出ををゝ又十七の雲雲雲ふハ補ルをふをひをよをををををある有原氏為
徒業葉下の何ふををづををををるををふのををををををよをををををと

新拾九 をを集 ちゝや物ゝるゞし北をの秋のふ風ゆを おもひ のををやををををををる
ふををハふにをやをゝをり
ををゝ

拾十六　花の色は何の世にかとそうぐひすの初ねの枝　赤　ふ　ふ君そ

元浦集　まつ山をたち　赤　あ　あよりそうすくこの紅葉とそ思ふる山はそくこに

られ〳〵ハあを二つ　こ　ま　る　一つ　ハ　ほ　ま　て　ま　ま　い　ぐ　又　拾　き　の　あ　バ　そ　の　下　へ　を

深　こ　り　ま　例　を　こ　ア　ほ　ふ　ほ　ま　き　ま　あ　ま　ア　そ　ほ　風　あ　ふ　を　そ　ほ　あ　ど　を　さ　れ　ど　こ　み　こ

八　百　葉　の　あ　を　五　て　て　へ　る　ま　て　実　ふ　ほ　ま　ま

古二　山ぶきをあやあ　赤　さ　こ　そ　花　ま　ん　と　う　ま　き　ん　人　の　こ　ち　ひ　こ　あ　く　ふ

こ　を　ハ　あ　す　ど　二　つ　を　あ　り　し　ら　れ　た　上　の　あ　ハ　を　の　を　あ　れ　バ　ち　と　る　ま　へ　又　は　あ　の　二

の　ま　を　ほ　や　あ　く　さ　紀　そ　と　ち　る　か　ほ　り　家　一　誤　へ

○　六　作　ま　ば　せ　こ　が　ま　り　さ　ま　ま　え　つ　く　あ　き　く　ら　ん　ほ　き　月　歌　に　を　た　ふ　証　を　そ　こ　を　ハ

あ　を　異　を　て　ま　ふ　そ　と　の　こ　い　つ　る　い　み　し　き　証　が　と　へ　下　の　そ　ハ　異　に　ら　例　あ　を　ど　ど　に　上

の　あ　を　異　く　と　ハ　例　も　理　り　そ　あ　し　呼　あ　ハ　万　葉　十　一　ふ　を　て　結　自　雲　莫　田　名　引

と　ほ　る　を　を　せ　る　誤　へ　あ　べ　て　六　作　の　う　ち　万　葉　の　あ　を　と　れ　る　ふ　ハ　え　も　い　を　ま　証　が　ま　と

多　き　ぞ　う　し　さ　て　夫　木　深　仲　正　ち　り　ぬ　と　を　ま　ハ　ま　や　う　そ　い　る　く　の　木　葉　を　ば　ぐ　こ　ば

谷　乃　つ　ど　風　日　寂　蓮　牛　の　ま　て　い　ま　る　ま　を　ま　れ　こ　つ　ぶ　り　角　何　を　ば　だ　と　て　ま　を

で　た　の　こ　そ　こ　を　を　の　あ　も　あ　す　ど　あ　し　ば　証　が

と　る　り　近　き　を　せ　ま　を　ま　ば　を　り　し　こ　ま

里語サニ　○一つのみ　み

左十一　秋の野に尾をうまぐ色にく茶の色あやらしんあをなを　三

〃一　寄社さるの赤これてろそぬきをうた　三　山風ふてそみぐるべらあ君

〃四　秋の野にやどりハ赤べ〳〵女郎を名をむつま　三　藤あく形くふ

〃十三　移ある雁の羽をきう紅　三　まどろ色でいやそうふふもあるまきる載

後六　秋の田ばりをふのいふれとあをなを何く　三　赤衣るハあり山を

俗ちとあすハつぐとも　ぬるみ武蔵人　を　ふ
あ　の　と　ひ　ま　ち　う　　あ　を　匂　ま　う

万八　春は花ちるあみさはらとかし　梅ぞ枝をあつうし　三　一説弥ふるる

後古万十　天の川せゞの志ゝ張あの志ゝをこそたゞ落るきぬを用ふくるし　三

左五　そゝ山のそゝ枝の紅葉ちりぬべ　三　ちるさへ又よとてゝに月ぞ

口十三　出てゝげあけを君の名たちぬ　ちぬべ　秋あくとてを人又りんかに

口十四　かぶゝに忍ひたりそびとびこと　三　月をちる白ゝ波ゝぞまされる

口十五　ゆをかつて空ゝのこゝそふるとハわゞみる山乃風もや　三　あるを

後六　世白ゝ月波をあバ人ゝ又せも何へぬ　ちりあバを　三　ちれる秋萩

口七　爰ぞうゑをそゝ人ゝ　三　やたちぬゞゝしゞ色の白ふぬゝしそえつる

口　秋の月ゝ白ゝうゝさやけ　三　ちみぢ葉乃おつる新ちへ又ゝとゝるる加那

太の外風をいゝこ清をそやこ哉を濃こ山ゝこ秋ふゝこ風もやこ冬ゝこ雪こ

たゝひ狩おゝ　赤をとゝへるとゝをゝ何ゝあるもあゝをもゝ月ゝさこ　又紅葉ハ呼みを用ふゝとゝ

踏ゝ度ゝ〻ゝ後の高ゝ用ひぞ風といゝゝゝ吳ゝるゝおゝし　袖の色ゝれをかゝ

こゝしゝゝいゝふせこゝとゝゝゝすゝこゝと意ゝを志げこゝとゝあどやゝうにゝゝいゝゝ

左十三　何ゝを　三　了発　神ゝを記ゝつゝ　紀ゝ多みゞ何ゝ才ゝきへなゞるゝをゝとゝきゝかゝたゝのゝん

こゝ社ハ淀ゝゝ水ゝをゝきゝしゝゝあゝをゝこゝとゝいゝへゝるゝやゝうゝに学ゝ多ゝ紀ゝれゝどゝゝふゝハ何ゝゞ代ゝ式ゝこゝをゝたゝの

あゝれゝのゝこゝとゝ月ゝゞゝゝ淀ゝをゝふゝゝをゝとゝり加ゝこゝ俗ゝ　源氏装束ゝ抄ゝ淀ゝこゝゝゝや人ゝハゝおゝをゝと

川ゝこゝとゝあゝるゝハゝ母ゝ古ゝ今集ゝの歌ゝ俗ゝこゝとゝゝろゝのゝをゝとゝゝんゝてゝとゝれゝるゝこゝ〇秋ゝ猿ゝ古

今五経伝ゝをゝをゝしゝの社ゝ者ゝれゝあゝゝのゝをゝれゝをゝ学ゝゝあゝるゝハゝ記ゝとゝゝやゝめゝんゝ小ゝ秋ゝの草ゝ蹴ゝしゝゝこゝ

をゝくゝを学ゝし誤ゝをゝるゝあゝゞゝし又風雅ゝを抜ゝをゝておゝつゝ羽ゝの枝ゝ紅葉ハ者ゝをゝおゝゝ見ゝ

うゝろゝき秋ゝの色ゝゝさゝめゝゝこゝハ記ゝゞゝゝこゝ

後拾一　経俊ゞ〻浦吹風ゝ活ゝあゝてはつゝのゝくゝ玉ゝ芦ゝの又ゝ　三　又ゝ武　三

千十三　みつゝ小社未紅葉を何ゝゝゝ流ゝ世ゝ玉社果ゝを袋ゝ只ゝよゝうゝを　三　志づゝ　三

後八　神ゝ世ゝ月ゝ　三　ぬゝゞ　三　ちゞあゝを叶白ゝ楽ゝゝみゝのゝそゞ紅ゝゝ

後拾十三

みちのくにをくにをくえにはやこをあらんふこ 三 ふきれ 三 いまぞいま

一万十二

ねづさら記さ 三 ゆるゆる 三 ふひをくをあてふらるをよりふしをの

山ゐおひこいぐさこ又ふこいりうこあどもを第集にあり又文ふもをりこ

をきこ又あさこわくひこるどおわし又第集十八ちあにをとあくふつと

ふをやをこ白妙の紬ふもこをせかぐはくこおきてかくしこをかやうもの

あめを 中にかぐはくこのこは上の山をこあどの

こゆをこのこふあくば別あり

一万十八ちこあ

そをにくをつ万にをとねのををひふふこ 三 ふをまぐ山うち歌をこ

菅家万葉下

ねらぐくをあををひつるあこどこをうき 三 ちづこを有らをつを

菅家集

おく山のえこ 三 えこぬを斗ふををこのふつかくををありりを

かくのめくを上ふ一つをいをひをを下に今こつをいををもねくをれどこれはこをくこをあ

らず○菅家万葉下考に歩の日に菅ふつをり屑の見江須見江須も菅がれて

二九

こをは上の須の字は必軍一誤りあるべし えこ おもと有べきをを

○一つのみ

拾十三

あ第にちげ 三 ふあふるまろこ菅ふまろがまろ○よいくよ〈ぬらん

原氏 英夫

ねさ 三 ふや人をあくくをらがくこはをもをあづを原をこをひぢを

後多羅地 御集

白をや白をにをうを 三 ちを月にを新あるをあるを歌のをこ

こをは志びをあをちげこ成をふをあををこうをにふををうをこといふを

後九

よ

をえをつるものをはえつをけがふにを球をのあるんふををを よ

拾十二　妻恋神ありあるあをのうびしきハ身をつらてどふ人のたゝぬ　上

子二　りふくきぬ花のちるしら雪かくばかりふるとしふるハ雨をなすふ　上

後十九　さゝばとわりをしはふいをませバ赤とぬ千おぶゝをおもし

拾十　おひしぎをきゝ〳〵神の系社あや板　上　ちをむゝをきゝたちかをぬぐく

口十二　山桜　上　夢恋しき人ふひひとをあての後をうびしかりりを

口　かゝと峯の松のうゝをとゝ思ひしハうれを　上　つゝふふ孤ハをにうを

口十三　あくをゝちぎこふあるまろこ菱まろハまろを　上　いくよへぬん

口十七　新風　上　ゐふゞをつあふちををんいうるうにうひをんをすん

後拾十二　百百山あるれをゝふゝ風あけをゝぞを　上　人を忘をやハをる

新六　や　上　しぐをあるよ神のあゝりせを木葉の後ふなふを深ゆし

口十四　をゝづゝをるはゝゝれらるれおくの海　上　ちふひの深のゝふゝ千あし

安弁よ　上　ゐのをよいゝぐゝよあをうぶよ　おふゝぶよ　ちをぶよ　ゝゝみぶよ

志のぶよ　わをれどよ　ゐるふよ　ふををへよ　すゝをふよ　ちゝふふふよ　ゝれ

ゐゐひいとおあし又ニ　をねゝをるハ

千十六　はゝろゝをゝゝゝゝ紀神ゝ　ゐハをある上毛の雲　上　下ゝゝゝゝ　上

○仰　ゐるよ　一段の活用と中段の活用とハ才二の音ふ下二段の活用とハ才四の音ふ下二段の活用と変格の活用とをゝゝをゝゝ下者の舞とゝ

古四　萩の花玉ぬんとをれをきぬよをゝ人を枝あゝゝ　上

口七　ゐがよゝひ思ゝ八千代ゝゝをゝをゝてゝゝあをてハ思ひ出ふせ　上

はゝゝひいとおゝし
また

古十六　みふ人を花紀ゝ千あゝぬあゝゝをの狭　上　かゝ紀ゝふせ　上

新六　なが世きば　らが山のそふ雪ちるしみやこ紀人よ　何ハ世さえ　よ

猿衣　早紀流のそら紀ゆくぶと笠ゆ紀と何ふぎの風よ　姻をゆつゝ　よ

こゝ世ゝハよこつゝて上あるハ呼出ス上ゝ○玉葉十なきふ世ゝさ
ゝ人ゝひてゐが名しゝと思ひ出よ　ゝ夕ゝ者の心ゝ思がくゝ世ゝあれるハ記がゝ上ゝ
てよのてハつの物用ふて早如の如紀物用の神と言なり　そのうゝハこゝ紀者
五紀記らつゝつゝ紀ゝ都ふいつゝるゝ　ゝて上ハいゝ者ゝ仰ゝ者ゝ辭ゝ者ゝて出ゝ者
神の都ふの者ゝ神と月ゝ　辭なり

○てよ

古四　記をかゝ紀天の川原のゝゝ世ゝ思ゝゝ敷をかぎゝて　てよ

新十三　たの久おゝんゝぐさハゝり紀ちぎりゝてゝ紀よの中紀者ふ思　てよ

伊勢物語　秋ゝ世に恋ゝまゝゝりぬあゝれがゝ世ぐゝる翼を今ハやえん　てよ

新十一　いせ集　なみはゞゝみゞかを芦のふしのまの何ゝで此世をゝ　てよ　よゝ

後拾十六　いのゝ者ゝんちゝとハ者ゝゝをかぎゝり　てよ　ゝゝゝ世ゝて者ふ者ゝ者ゝ

羽十　かゝゝてのゝゝふ者ゝ月あゝゝば者がゝゝ　てよ　天降る神

万二十　ほゝゝぎゝれちゝにちかゝゝをゝあを　てよ　ゝゝあん後ふちゝ何ゝあやゝ

○とよ

古三　やよやゝて山月ゝゝぎ沢ちゝとつゝん雲ゝ世ゝに出ゝゝゝび　とよ

万十　らが妹ゝがちのびゝ世よゝ　とよ

拾川　ゝ者　はゝゝゝ者山孫ゝゝゝゝぎちゝゝふゝを雲ハゝれゝゝ　とよ

金八　あゝゝゝゝゝやゝハゝなふぎゝ紀ゝゝあぎ　とよ　ゝ世よゝゝゝゝれぎゝりゝを

新十五　ゝゝゝゝ　とよ　ゝゝ面新ゝゝゝちぎゝりゝゝゝゝ志ゝ世ぎあぎゝゝゝゝあゝねバ

猿衣　ゝゝゝの　とよ　ゝゝゝゝゝ

後拾 ㊐じくハさせ 与 何方はあき衣よりかゝにふくゝれやと
㊐ かゝれん 与 おりひさえるんりぶりふにとおくをてハくるゝぞ

祢

後十 たのそんと新色したきをものをなきをたてゝたゞふ志を 祢
拾十五 ものゝとはゝるゝにつゝくゝとをさやハ袋りし志を考て 祢 と
後十三 ゝられ 祢 とゝいしたるゝ人思あをどとハぬるつゝきものゝぞ有ゝ家
㊐十九 君が代ハ鶴の都ゝ何えてき 祢 きゝぞ先あきゝられゝうゝこゝかゝをおく
拾十一 あゝとゝ幾月日にそへゝてゝ川ゝ時えゝりあり来ふあり 祢 とゝぞ思ふ

㊐十六 春風ハ花のあをきゝにふきをて 祢 とゝ紀あゝぞ思ふなくて ゝえゝべく
新十一 面ゝをよなえあゝぞ来て 祢 あゝゝへゝぞ思ふゝゝれゝとりゝゝぞあゝ
㊐十二 ゝゝえ 祢 ゝゝぞ思ふの山の雪新をゝかゝ思ゝゝれあゝとゝあゝきゝぞ

ゆゝ祢ハゝゝゝ年ゝ祢の誤用ゝゝゝゝ
今定家ゝ家あゝどゝ思ゝ述祢ゝとゝゝを係てゝゝある有ゝゝゝくゝゝ何ゝゝゝ

○ゝ祢 ゝゝ祢 ゝゝゝハゝゝて集ゝゝゝゝゝゝゝハゝゝゝゝゝゝゝ

□ 年ゆきぞよひさおいぬ志かハ何をぞをを 志 ふれば物思ひもあり

□ 二 そをといふふちぐで 志 とゐる物あるぐで何を橘ありひをさるゐ

□ のうゑぐちる秋をでぐ紀をくる巻立てよの中をを 志 うれば

□ 妻ゐ社ゆるハなるぐの恋ぐ花ちるをてしをぬ人 志 ありれば

花ぐちるぐびぞとぞを渭青ホよををれをも古今集遠鏡をのるぐ清の字を志るぐて清言ホよををぐめるぐ遠鏡

ハ此書より略ホ □ 出なる書なれをを尤より処となるををぐ——ゐるハ此哥ゐ橘ホハをぐれるれをもで式五の三ぐにいるせる伊勢物語

う我うみの哥社 □ いり川をぐの恋べるぐ人のあくが恋人花 志 ちぐびぐちよもへぬぐし

たぐびちるぐきる 数をのるくに 志 ををる物あるぐぞわをうぐひをホおるるるぐやハ

○なををあふる身の

をををを——ぐるくる □ 如くに風とたホの秋と 志 あるりせぐみや万がぐをのををををぐや

ゆしるホ人をとを

ぞををうるるぐ——ををホ □ をぐ——ををホ □ をぐをををを

志ぞ

古九　日のゝと時石社うゝの新雪に降がくさゆく紅を 志 ぞ思ふ

同十七　ちはやぶる宇治の橋守あれを 志 ぞ何の社と思ふ年社へぬ社を

万八　たちぞ来社花ちる里社かとぞ出かゝと思しつゝ鳴く日 志 ぞおもふ

同十六　世ごろも志をおもふと思べもあるを思のこしつゝ 祈のこ 志 ぞあく

志ぞ

志ぞ

古二十　あゝゝ社年社をゞめふかく 志 てそ多年をかゝてたのさきろ色

志ぞ

いせ物語　さきやこの天社何ごろもうべ 志 てそ思ひみきしとたてまつりける

志ぞ

志か

古一　色を 志 かせとあてをりつる事があるこ志かくるゝ山のさゝゝ社

同十四　りよりハ今らんと社時日を数しゆ川 志 かとのこまちぶるべき

志ぞ

同十二　何づ万ぢ社さやの中山あかく赤あ 志 か人をおすひそめきん

同十三　色ぞつ流の男社ころろをあ赤 志 かそ人色つこのせ社ぞむん

こ社ゝハ何色のうにおをそがすゝの間赤をを色多格之

志ぞ

古十一　秋の田社ゐにて人をこひぞ色あどろかす見れ 志 すせん

同　人めする袖ハあやおどぬく社あどの間赤ぬこ社ぬ 志 すぞん

同十八　月夜かゝしと人赤法ぞやゝばこてふふくころまこだ 志 すぞ社

同十九　う色の色見赤をつ色うぐひす社社とゝく といとひ 志 すをる

後九　ゝろの海赤原をちろ社あるりせそあふりた思をうゝみ 志 すをん

後拾遺九　ゝくにどにゝろをうる花の色を見るゆく人をつを 志 すせど

原氏若紫系　ゝゝ多ゝう恋万社をぞ社乃古社うくは菓のとぞしにゝハ色 志 すをど

清

古風

古十四 ゆるがとあふくるまはれり 志 もゆるゝ雲くに出のくさけばまつぞ物しき

同十五 秋風ぬ月を分て 志 もふかくふかくふかく

新千載　我うくて思ひかたきうれしさを　志

[illegible]

○志ゑ

古三　歌やくもの紀をやまどへるほとゝぎす　志ゑ　ゑがてゝ

〃十三　ゆくへをしらぬ　志ゑ　おもきんうつ

〃十四　あが里のよがをてをり部ゑたづらに　志ゑ　ゆくへ

金三　今宵　志ゑ　わにせぬ[illegible]

古三　むらへやいろゑ高[illegible]紀わとゝぎすあるう　志ゑ　鳴てゝろゝん

〃十四　天の川[illegible]にぬ[illegible]せだやなぶ[illegible]の秋を　志ゑ　月

拾十一　何まとゝしとゝろ紀みそぎのすゝ人の思　志ゑ　物をなすえするる

〃十二　夕のゝど[illegible]ろる　志ゑ　思をゝん[illegible]ゝ定あるを[illegible]

〃十七　ゝに　志ゑ　なりわるん女[illegible]人のすのいひさぐふくさよふ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

右の外、萬葉ハ志ヒとゝ、やまめ、辞枕、ゝ、ゝ、ゝ

らくハ雨を延る詞あり

らく

ち七　はくらぐるかちりかひくすをおい　らく　のこむといふあるをまがふふ

拾十五　万七　塔みてばのぬるいそ社若の船をや足　らく　まくあくこと　らく　のおおき

七の巻三十七の詞のうららくの部にらくハ雨をのべたる詞なふあらくとあらくらくとうらうらくとうらうらくとうらう

きく　附　きく　きくさ

左十八　五月雨はれ　きく　ふあきぬおく山乃木葉にふきるゆそやきかふし

口十九　玉鉾あれどあふぞハよ　きく　かるうやのみどきてゆきどあし　きく　もは

後三　をくゝをそろうきこゝ伊れの除はきぼばるる月日のをて　きく　元あし

大和物語　なすが　きく　そたのミりるう船あ中ゆ神ろ　あるぐのりゝ伊ゆををて

あふ万葉ふハあれゝ　きく　こゆ　きく　かし　きく　やれ　きく　いとき　きく　うあし　きく

いゝかき　きく　初ゝき　きく　れし　きく　つゝき　きく　あどおかり

又ゝをき　きく　あ　きく　ゝを　きく　つゆ　きく　ゝあどのき　きく　きゝふ　ふのき　きく　とり

じ辞ゆをゝゝあるふをゝ　ふとあるゝこなし

下知の用あり多ゆ　ハ
大りゝハ所ふをゝふあるゝ也

三九

かし

○かしハ切をゝゝ辞のりに伊るふとをゝす　ふをゝのや伊あどの辞あ

をば又ゝ格の終び辞ゆて　切ゝるりにをおくるゆ伊ゆ

左十　なすゝをゝりをゆれて　かし　ゆ伊ゆをゝをあんををとうつせえん。

後十六　ゆゝ　かし　ゆ伊ゆをゝ　清　をみ山どりにをゆをゝ。

松十九　いをゝゝがゝあふハ伊ゝゝをつゝ　かし　りがてゝにをてもえよ。

後松十六　あゝむををば月りゝむをぬあを　ゆ　をゝ　かし　ゆゝをゝりぞ。

ゆゝばゝをゝりをゝゝもあゝゝ　かし　をゝをゝをゝでゆりゝはおとゝをよ。

口十七　をゝえゝをゝりゝをゝ伊ゝりゝりゝるゆあゝゆと人のゝ。　かし

元禄集　松をのゝ引をゝりゝゝバゝゝ　かし　ゆ花たゆゝふゝゝゝ乃御ゝゝん。　かし

後拾十七 おもいのちぞきえぬべき　この葉ふるかぜよ　かゝ　君

口三 みちのくにぶるこゝろ　かゝ　波をあぐ　のみそぎしつゝ

口十六 ちゝとそ　ほゝぶやえ　ゆゝん　秋のよもすがら　かゝ　桂のとばりをぞ

千十七 あまぎるこゝろ　雪の身ぞ　かゝ　とゝふ　ほんとあゝし　雪ぬいふる

新一 と　見こ　かゝ　梅さゝり　形る　ふが　雪ぬうと　紀も　人さ　ちりにてそ　れ

リせ物語 高〳〵ば　清　さそそ　ゝよ　かゝ　ちはや　姫る　神の　いさ　むる　をあゝ　形く　ふ

大和物語 ちて　ゝさ　みゝす　ゝ　かゝ　雪の　なく　をつ　のゝや　ふひ　いづべき

○えぼうしに　年ぼを　谷れ　雪の　川ゝて　もあつ　のあく　ぞふ　すゝ　きぬ　かゝ　雪ハ

ふぞ　とい　ゝて　ゝば　ぬる　かゝ　とゝふ　へゝ　ゝば　ぬ　かゝ　といへ　ハ　ぞの　ぬば　び　辞　多が　へり

後拾十七 とへ　かゝ　ふ　ふく　ゝと　ゝて　ゆゝ　じ　雪の　身を　ふぞ　しと　ゝて　雪ぬ　葉ふ　やゝ　かゝ　ると

新八 とへ　かゝ　ふ　かゝ　ゝく　ゝく　後の　ふゝ　ゝて　ふ　あゝ　ゝの　かゝ　ふ　秋の　袖ぞ　ぬ　を

かくのごとくとへあをふてをいつり、又濱松中納言物語の羽ふハかゝやとや

をふていへるところをあ

初学抄とゝかゝ〳〵ゝよかゝとへかゝあどいへる　をぐひのおふをにあゝ

ひてかゝいゝくゞ　ゝゝよをの辞ぞとのゝんゝふるハ　ゝがをゝ　ゝふ　ゝ　引る　あ

どゝゝ　ゝゝ中に　ゝ　ゝゝあを　あゝ　ゝる　ゝ　多を　ふゝ　ゝし　又文　ふハ

ゝゝ　ゝゝ　ゝゝを　ゝ中に　ゝかゝ　ゝ　ゝかゝ　ゝ　ゝかゝ　ゝ　ふかゝ

らんかゝ　ゝきんかゝ　ゝあどゝゝ　ゝ　ゝいへるをゝ